

虚構作品の再制作における同一性について

藤本 大輝

近年、ハリウッドに代表される映画業界では、アイデアのネタ切れがささやかれて久しい。その為か、国内外問わず公開される映画やテレビドラマなどの様々なジャンルの虚構の物語において、すでにある何らかの作品を引用、言及するような、いわゆる“リメイク”と呼ばれるような作品が多く発表されている。そんな昨今のリメイク作品とその引用元との間には、どのような関係があるのかに興味を持ち、考察を行った。

複数の虚構作品が互いに引用・言及しあう関係を説明する概念としては、“間テクスト性”という概念が用いられることが多い。しかし間テクスト性の概念を用いた研究は、テキストの吸収や変容による意味の生成過程を追ったものが多く、リメイク作品のような引用における同一性に関する研究は見られなかった。そこで本研究では、ネルソン・グッドマンが芸術の諸分野で行った再制作の理論を用いて、リメイク作品の分析を行った。

先行研究であるネルソン・グッドマンの複数主義の理論を分析し、それを現代のリメイク作品、その中でも、形式がある程度決められており、比較のしやすい映画作品に適用した。日本映画データベース(JFDB)に存在する映画のなかから、公式にリメイク作品であると明言がなされている作品を七つ選定し、それらを元となる映画と共に比較した。

ネルソン・グッドマンが芸術の諸分野で提唱した、作品の同一性を認めるための要素には以下の三つがある。文学に用いられた、同じテキストから生まれた解釈であるという事実関係から同じ作品であると指定する構文論的な特徴、音楽に用いられた、音階やリズムなどの具体的特徴の共通点を見る形式的な条件、そしてそのような特徴、あるいは対象を成す特徴から、再制作前の作品から再制作後の作品への指示を見る機能的な条件である。これらを映画のリメイク作品に持ち込み考察を行った。

考察の結果、これらの同一指定の要因により、複数の形を持つ映画作品の構造を体系的に説明できた。しかし構文論的な特徴は厳密な同一性の指標とはなるものの、その定義は厳密でありカバーできるリメイク作品はかなり限られたものにとどまってしまった。一方形式的な条件と機能的な条件は、広い範囲のリメイク作品に同一指示を認めることができるが、あらゆるものを根拠にできてしまう指標であった。今後の課題としては、構文論的な特徴による同一指定をより多くの形のリメイクに作品に適用できるものに、そして形式的な条件と機能的な条件による同一指定をより明確な根拠からできるような理論を考えることが挙げられる。

(指導教員 横山幹子)